

バイオセラピー研究の最前線⑦

野生動物の嘆きを 人間に伝える活動を世界で展開

特集 3

野生動物と30年以上もつきあってきた安藤元一先生の話は面白い。アフリカでの映画撮影の裏話から、ムササビやカワウソの生態など実に変化に富んでいる。ムササビを語らせたなら1週間くらい1人でしゃべり続けるのではないか？アジアのカワウソを守る活動、琵琶湖の水を守るNPO活動など、様々な社会活動にも参加している「行動する研究者」である。こうした安藤先生に研究の軌跡を大いに語っていただいた。

物理学から動物行動学へ

「私は、大学では物理を専攻していましたが、2年生頃から全くわからなくなり、3年から動物行動のゼミに参加してその面白さにとりつかれました。卒論では八王子の高尾山のムササビの観察に取り組みました。大学を卒業後、契約社員として動物映画を作る会社に入り約2年間、アフリカで動物のテレビ映画制作にADとして参加しました。『動物を研究するのであればアフリカを一度見てきなさい』という先生のアドバイスからです。『動物家族』というテレビ番組でした。」

好きな動物で飯が食えれば 最高と思ったから

「アフリカで生活した2年間の最大の成果は『ものを持たなくても生活ができる』と実感したことです。人間は何もなくても世界中で生活できること、言葉が違ってても人間は基本的にみんな同じだなと感じたことです。

アフリカから帰ってしばらくは、大学時代の先生の手伝いで何とか生活していましたが、好きな動物を研究し



東京農業大学農学部
安藤 元一 助教授

て飯が食える可能性に賭けてみようと思い、大学院進学を決意しました。」

ムササビを生涯の友としました

「大学院では、学部の時に手がけたムササビの生態研究に取り組みました。ムササビがなぜ空を飛べるような



樹上のムササビ 実に興味深い動物である

進化をしてきたのか、なぜ木登り上手な指の形になったのかという研究です。ムササビは大きい動物ですが、行動圏は100～150m四方で、あまり動かない無精者です。ムササビが飛び姿は何度見ても感激しますね。ムササビの体のつくりがどうして空を飛ぶのに適応しているのかということの研究しました。具体的には、何を食べているのか、骨の形の特徴、生まれてから大人になるまでの成長度合いを調べました。この研究の成果は、普通のリスを基にして体が小さなモモンガが進化の中から生まれ、最後に進化の行き止まりのような形でムササビが誕生したのではないかという結論となりました。もう1つの研究成果は、ムササビのように滑空生活をする動物とコウモリのように羽ばたき飛行をする動物は、進化の方向は全く違うものであるという結論です。]

先生は、カワウソの研究者としても有名ですが、日本カワウソはすでに絶滅しています。どのようなカワウソ研究をしているのですか。

絶滅したニホンカワウソの二の舞はさせたくない

「私が大学生の時には、まだニホンカワウソが生きていました。学生時代、先生に連れられて高知や愛媛にカワウソの調査に行きました。ところが、その後はカワウソとの関わりは全くありませんでした。しかし、その間にニホンカワウソは絶滅してしまったのです。その理由は、調査研究グループ間の連携が不十分で、その保護のための対策が十分とられなかったからです。

1980年代に韓国の海岸で、カワウソの糞を発見しました。その後韓国の研究者と連携して調査をしたところ、韓国でカワウソが生息していることがわかりました。絶滅したニホンカワウソの二の舞はさせたくないと思い、その生息調査と保全活動を行いました。その後、こうした研究は、台湾、タイ、インドというようにアジアの各国に広がっていきました。当時一緒に活動していた若者が、今ではそれぞれの国を代表する研究者になっています。」

学生の卒論指導はどのように行っていますか。また、野生動物の視点から人間の社会や生活のあり方を考える研究とは、どのような研究ですか。



韓国カワウソの赤ちゃん 実に愛らしい

野生動物から見た人間社会・生活のあり方を解明したい

「学生の卒論指導ではアライグマ、丹沢のシカ、サルなどの獣害対策のための基礎データを集めています。それと平行して周辺住民の意識調査なども行いました。その結果、サルの場合は頭数は増えていないのに被害が大きく拡大しているのは、サルの生活拠点が山から里に変化していることが原因であることがわかりました。すなわち、サルの都市化ともいうべき現象です。

また、都市動物の代表としてスズメを学生の卒論で調べさせました。昔のスズメは、人が近づくとすぐに逃げてしまいましたが、最近はすうすうしくなっていて逃げません。お台場あたりでは手乗りスズメが出現している始末です。これは、人間がエサを与えるからなのです。今年の学生の卒論は、東京・神奈川地域におけるスズメの逃走距離マップの作成になりました。これは、学生がスズメに近づいた時に、何mで逃げたかをひたすら記録するというものです。

バイオセラピー学科では『人間の幸福にとっての動物』という視点で教育研究が行われていくと思いますが、私の場合は『動物にとっての人間とは』という視点から研究を行っていきたいですね。例えば、トキを復元する場合、トキの立場になれば、どういう場所が一番望ましいか、人間はそのために何をしなければならないか、トキが人間に何らかの被害をもたらした場合にどのような対応を人間はとるべきか、こうしたことを多くの学生と一緒に研究したいですね。」

(聞き手：栗原ちとせ)